

## 平野富二の生涯(2)～富二を支えた人々～

本会理事 野田和弘

本稿では、平野富二(1846～92・以下「富二」と記述)が明治5年(1872)上京し、活版印刷事業を広めながらも、自身の念願であった造船事業へ進出していく過程と、それを支えた人々を中心に述べる。

## 1、横浜製鉄所への経営参加

明治9年(1876)30歳の富二は、幼少時からの知人であり、長崎製鉄所で共に働いた杉山徳三郎の要請を受け、横浜製鉄所の共同経営に参加した。同製鉄所は、徳三郎が政府から借り受けた機器製造工場であった。これは、富二にとって東京での活版印刷以外の事業に進出した最初であった。しかし、後述する石川島造船所の借り受けが許可されたため、同年末には横浜製鉄所から離脱した。但し離脱後も富二は、同製鉄所との取引を続け、明治13年(1880)には政府から同製鉄所を買い取っている。

杉山徳三郎(1839～1930)は、富二と同じく長崎地役人の町司の家に生まれ、海軍伝修生を経て長崎製鉄所の機関方を務めた。幕末頃は富二同様、各藩に出向き蒸気船の運転や修繕を指導した。横浜製鉄所経営後は筑豊で炭鉱事業に進出、蒸気力を用いた排水ポンプを使い炭鉱経営に成功した。以後、炭鉱での蒸気機関の普及に努めた。晩年は長崎に戻り、田上に徳三寺を開いた。

## 2、石川島平野造船所の開設

石川島造船所は、嘉永6年(1853)幕府が水戸藩に命じて、大川(現・隅田川)河口の石川島に造らせた造船所である。富二は、以前からこの造船所に着目し、政府に借り受けを申請していたが、明治9年に許可された。借り受けの保証人に岩瀬公圃がなった。

岩瀬公圃(1832～1891)は、浦上村庄屋高谷家の一族に生まれ、阿蘭陀通詞岩瀬家の養子となった。34歳で大通詞過人となり第9代岩瀬徳兵衛を襲名、公圃とも称した。薩摩の五代友厚と親しくなり、小菅修船場の建設では、五代の代わりに工事管理や対外折衝の窓口を務めた。明治7年(1874)上京し、五代が進めていた事業に参画した。その頃、富二が保証人を依頼したと思われる。

公圃は、富二とは経歴も全く異なり、仕事上の接点も無かったが、富二の小菅修船場や活版事業での経営力や人柄を良く見抜いており、保証人を引き受けたものと思われる。

造船所を運営していくためには、中核となる優秀な人材が必要であった。しかし、東京に出てきて間がない富二には何の人脈も無かった。そこで富二は、工部省の山尾庸三に相談した。山尾は、いわゆる長州ファイブの一人だが、富二が長崎製鉄所の頭取時代、同製鉄所の査察を行い、不正経理を指摘した人物であった。結果として富二は、頭取を引責辞任している。



平野富二 (提供 平野富二の会)

山尾は富二の依頼に応え、兵庫県出身の技術者稲木嘉助と英国グラスゴー大学出身のアーチボルド・キングの二人を推薦した。彼らは造船所の設立時から富二を支え、造船所の基礎を築いた。

また、造船事業には多額の運転資金が必要であった。なんらの後ろ盾が無い富二は、独力で資金を調達せねばな

らず、常に資金不足に陥った。

そこで富二は、第一銀行を設立していた渋沢栄一に融資を頼んだ。しかし、富二には担保も無く、渋沢は大いに悩んだようだが、最終的には銀行から7、8万円ほど融資した。さらに渋沢は、富二が説く造船業の将来性、重要性を理解し、個人としても出資し、後には造船所の経営に参画した。

## 3、最後に

明治25年(1892)12月、富二は、東京日本橋で演説中、脳溢血で倒れそのまま死去した。享年46。富二の墓は、東京谷中霊園にある。

富二は、念願であった造船事業を築いたが、その過程は非常に厳しいものであった。しかし、その中で富二が、孤軍奮闘していたかというところではなく、その折々で色々な人物が富二と関わり、富二を支えたといえるのではないだろうか。それは、日本に近代造船業が必要であるという富二の純粋な熱意が、周囲の人達を動かしたからでもある。

また富二は、決して無名ではなかった。上京して数年の間に、活版印刷事業を全国に広めていた。活版印刷は設備的には小規模だが、情報産業の要であり、いわば文化の担い手でもある。富二は、この分野で多大な貢献を果たしていた。この事も富二が造船事業へ進出する後押しになったといえよう。

2回に渡って平野富二について述べたが、この偉大な業績を残した人物が、出身地の長崎で今ひとつ知られていないのは、やや残念なことである。

本稿は、令和6年7月例会の発表要旨である。

## 参考文献

江越弘人『平野富二』 長崎文献社 2019年  
古谷昌二『平野富二伝 考察と補遺』 朗文堂  
2013年